

CEL生活意識調査分析（経済社会、生活充足度）～世代視点～

豊田尚吾¹

1.はじめに

大阪ガス株式会社 エネルギー・文化研究所（以下CEL）は2005年から毎年「これからの住まいとライフスタイルに関する生活意識調査」を行っている。生活者の住まいやライフスタイルに関する諸問題、その背景にある意識を調査することにより、CELの目指す持続可能な社会、生活づくりに資する情報を得ることが目的である。（詳細に関してはWEBサイト参照²）

2010年も1月から2月にかけて同調査を行った。本稿では、その中で、社会経済、および生活満足に関する質問について、結果を確認する。そこから、生活者の社会的問題への関心の把握と、生活満足度に関する生活者の実際の意識を見ることを試みる。

特に、今回（今年度調査）は「世代間差異」に着目することをテーマにしている。さらにいえば、若年者の意識に焦点を当てることを意図している。従って、世代という切り口に重点を置いて結果を確認していく。次節では具体的な社会的課題や、社会に対する貢献に関する設問の内容と結果を概観し、その特徴を確認する。

さらに、生活に関する現時点での充足度（満足感）を、世代別に検討することを通じて、現代の若年層がどのような特徴を持っているのかを検証する。

結論としては、若年層は、雇用問題を中心に、自身に身近で深刻な問題に関心を示し、生活不安も感じていることが分かった。ただ、若年といっても20代と30代、男性と女性とではかなり意識が異なっており、ひとくくりに捉えることは適切ではない。また、社会に対する貢献意識は女性の積極的姿勢が目立ち、生活充足度に関しても、若年層に限らず、女性の高い満足度を確認することができた。

2. 社会経済、生活充足感に関する結果の確認～世代の視点から～

本節では2010年に実施した「これからの住まいとライフスタイルに関する生活意識調査」計49問³の中で、主に社会経済要因に関わる質問および生活充足感に関する質問、計4問について取り上げる。その際、若年層（20歳代、30歳代）に注目し、その他の世代と何が異なり、何が同じかということに注目しながら概観する。

2-1. 経済社会問題一般に対する関心

質問内容「あなたが関心をお持ちの政治・経済・社会問題は何ですか。」

選択肢：エネルギー問題、地球環境問題、経済成長の問題、生活・暮らし向きの問題、国内政治の問題、国際政治の問題、食糧問題、世界的人口増加の問題、犯罪問題、生命倫理・医療問題、少子・高齢化社会問題、社会保障問題、教育問題、情報化（IT）問題、自然災害対策、雇用問題、格差社会問題、その他（※複数回答可）

結果：全体像は図1の通り。関心がある上位4項目はかなり拮抗しており、1位「少子・高齢化社会問題（51.5%）」、2位「生活・暮らし向きの問題（48.7%）」、3位「地球環境問題（47.7%）」、4位「雇用問題（47.2%）」となっている。2位、4位の暮らしや収入など、身近な生活に関わる

¹ 大阪ガス株式会社 エネルギー・文化研究所（CEL） 主席研究員

² <http://www.osakagas.co.jp/company/efforts/cel/life/index.html>

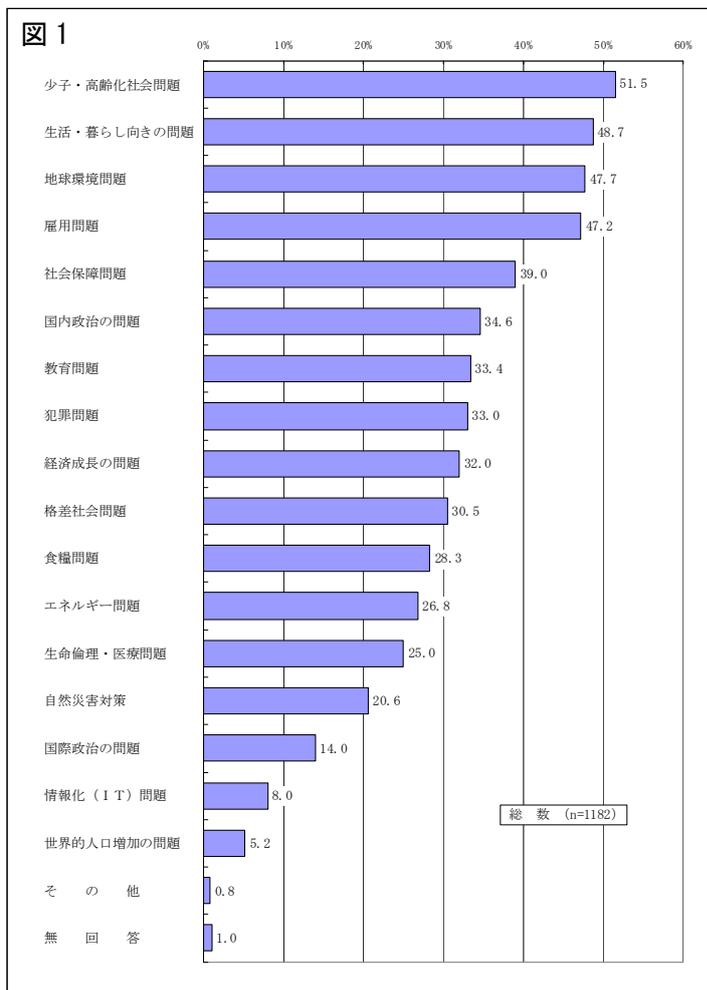
³ フェイス項目（性別、年齢、職業などの属性情報に関する質問）を除く。

項目が選択される一方、少子高齢化問題や地球環境問題など、現時点では切実な弊害を直接実感しにくい長期的な項目も選ばれている。

では比較的若いと見られる 20 歳代、30 歳代の回答者はどのような意見を持っているのであろうか。これを見たのが表 1 である。表中、各行の下段は全体（回答者全員）の結果からの乖離を表している。これを見ると、若年層の問題意識は世代全体の結果とはかなり異なっていることが分かる。20 代男性にとって、最も関心が高いのは、圧倒的に雇用問題で、過半数の回答者が選択している。そして地球環境問題、経済成長の問題、生活暮らし向きの問題、国内政治の問題と続く。

情報化、雇用問題等の他は全体平均よりも関心度が低い項目が多く、特に少子高齢化問題や暮らし向きの問題など、全体では 1 位、2 位の重大項目への関心が 10 ポイント以上低いことが分かる。

30 代男性は一転して少子高齢化問題が関心度の 1 位になる。ただ、やはり雇用問題への関心はそれに拮抗する高さを示しており、地球環境問題、暮らし向きの問題、そして教育問題がそれに続いている。全体平均よりも 5%以上乖離して高い関心を得ている項目はなく、全体的



に社会課題に対する関心の薄さがうかがわれた。

20 代女性においてもやはり雇用問題への関心が高い。63.3%が選択するなど、その程度は男性以上である。少子高齢化問題、生活暮らし向きの問題、地球環境問題と続く。20 代男性と異なり、既に教育問題への関心が 40%を超えている。これは男女の年齢によるライフステージの違いが表れた結果といえるだろう。

表1「あなたが関心をお持ちの政治・経済・社会問題は何ですか。」

	上段: %									
	エネルギー問題	地球環境問題	経済成長の問題	生活・暮らし向きの問題	国内政治の問題	国際政治の問題	食糧問題	世界的人口増加の問題	犯罪問題	生命倫理・医療問題
全体	26.8	47.7	32.0	48.7	34.6	14.0	28.3	5.2	33.0	25.0
男性20代	27.7	35.6	35.6	34.7	33.7	17.8	17.8	5.9	27.7	16.8
乖離	0.9	-12.1	3.6	-14.0	-0.9	3.8	-10.5	0.7	-5.3	-8.2
男性30代	29.9	42.7	32.5	39.3	31.6	12.0	19.7	7.7	27.4	16.2
乖離	3.1	-5.0	0.5	-9.4	-3.0	-2.0	-8.6	2.5	-5.6	-8.8
女性20代	11.7	39.2	26.7	44.2	19.2	8.3	19.2	2.5	30.8	23.3
乖離	-15.1	-8.5	-5.3	-4.5	-15.4	-5.7	-9.1	-2.7	-2.2	-1.7
女性30代	19.0	54.3	21.6	51.7	19.8	8.6	25.0	5.2	34.5	24.1
乖離	-7.8	6.6	-10.4	3.0	-14.8	-5.4	-3.3	0.0	1.5	-0.9

下段: 全体からの乖離

	少子・高齢化社会問題	社会保障問題	教育問題	情報化 (IT) 問題	自然災害対策	雇用問題	格差社会問題	その他	無回答
全体	51.5	39.0	33.4	8.0	20.6	47.2	30.5	0.8	1.0
男性20代	29.7	28.7	26.7	17.8	8.9	58.4	24.8	1.0	1.0
乖離	-21.8	-10.3	-6.7	9.8	-11.7	11.2	-5.7	0.2	0.0
男性30代	48.7	29.9	36.8	4.3	11.1	47.9	30.8	0.9	2.6
乖離	-2.8	-9.1	3.4	-3.7	-9.5	0.7	0.3	0.1	1.6
女性20代	58.3	29.2	40.8	7.5	21.7	63.3	31.7	0.0	1.7
乖離	6.8	-9.8	7.4	-0.5	1.1	16.1	1.2	-0.8	0.7
女性30代	52.6	30.2	44.0	6.0	19.0	44.8	31.9	0.0	0.0
乖離	1.1	-8.8	10.6	-2.0	-1.6	-2.4	1.4	-0.8	-1.0

30代女性の関心の高さは、地球環境問題、少子高齢化問題、生活暮らし向き問題、雇用問題の順番となる。一般に、地球環境問題への関心が高いのは主に高齢者層なのだが、30代女性の関心も高い。オーガニック製品やファッションなど、大人段階に入る女性のライフスタイルの中に環境問題が取り入れられていることも多く、このような結果につながったのではないかと仮説を設定することができる。

一方で若年層の女性は国内政治への関心が非常に低く、経済・エネルギー問題などにもあまり興味を持っていない。今後ますます重要になるテーマであるため、次代を担う女性が、このような問題に対する関心を高めるような、情報提供の工夫が必要との問題意識が得られる。

以上、社会的課題に対する全体および若年層の問題意識を確認した。20歳代は、やはり自分が切実に感じられるような雇用問題に対する関心が、他の年齢層よりも高いこと、20代30代は若年層であるものの、社会人としての経験の差が影響するのか、必ずしも似た結果になっているわけではなく、それぞれの特徴がでてくる。従って、若年層と一つにまとめて考えるべきではない場合があり得ることに注意をする必要がある。

2-2. 生活の不安感

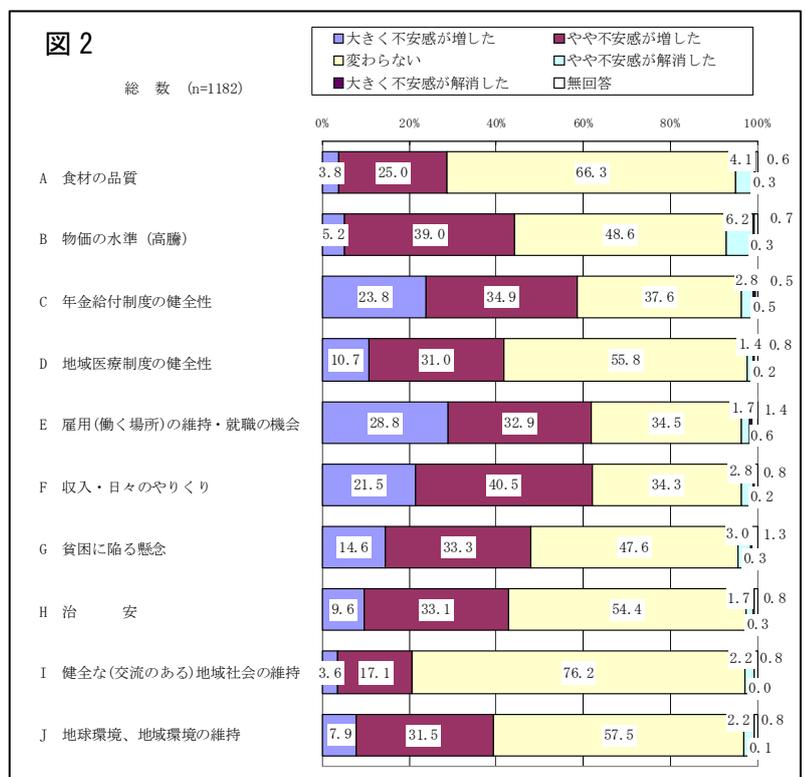
質問内容「以下の項目に関して、1年前と比べて、あなた自身の生活の不安感はどのように変化していますか。」

回答方法「大きく不安感が増した」「やや不安感が増した」「変わらない」「やや不安感が解消した」「大きく不安感が解消した」

項目：食材の品質、物価の水準（高騰）、年金給付制度の健全性、地域医療制度の健全性、雇用（働く場所）の維持・就職の機会、収入・日々のやりくり、貧困に陥る懸念、治安、健全な（交流のある）地域社会の維持、地球環境、地域環境の維持

結果：全体像は図2の通りである。「大きく不安が増した」という結果だけを見ると、最も多く選択された項目は「雇用（働く場所）の維持・就職の機会」（28.8%）であった。一昨年のリーマンショック以降、景気が低迷し、特に労働市場の構造変化（非正規労働者問題、ロスジェネレーション問題）に各種制度が対応できていない問題などもあり、雇用が強く問題視されていることが分かる。足下の完全失業率は5.2%（2010年5月）であり、15歳～24歳に至っては10.3%と、1年前に比べ1.3ポイントも上昇している。

次に大きく不安感が増したと評価されたのは「年金給付制度の健全性」（23.8%）である。これも問題が顕在化してしばらく立つが、抜本的な解決には時間がかかる。このように、持続可能な制度構築そのもの



の展望が見えてきていないという状況を反映しているものと思われる。そして「収入・日々のやりくり」(21.5%)がそれに続いている。

「大きく不安が増した」に「やや不安が増した」を加えた値で見ると、「収入・日々のやりくり」(62.0%)が一位となり、「雇用(働く場所)の維持・就職の機会」(61.7%)、「年金給付制度の健全性」(58.7%)が同程度で並んでいる。「貧困に陥る懸念」(47.9%)、「物価の水準(高騰)」(44.2%)などがそれに続いている。

さて、前節と同様に、若年層の特徴を見てみよう。それを表したのが表2である。上表が「大きく不安が増した」という回答のみの結果、下表はそれに「やや不安が増した」も加えた数値を表している。黄色が全体の数値より5ポイント以上上方に乖離している場合、青色が同じく5ポイント以上下方に乖離している場合を表している。

これを見ると、現在の社会が20代男性にとって不安を高める要因が多い一方で、30代男性にとっては相対的ではあるものの、不安要因が少なくなっていることが分かる。

これは30代になると不安要因の展望が見えてくるということの意味しているのか、生まれた時代に影響された、世代間格差を表しているのかは興味深い問題である。

20代男性は日々のやりくりや雇用、その結果としての貧困に不安を、他の世代よりも強く感じている。「大きく不安が増した」と選択した回答者の割合が全ての項目で全体平均を上回っていることはおもしろい。「食材の品質」、「物価の水準」などについても、乖離幅は大きくないものの、もともと(全体)の水準が低いため、乖離率に直すと非常に高いといえる。

30代男性になると、雇用問題に対する懸念はある程度落ち着き、年金問題が課題として残る程度で、後は平均に収束していく。20代女性も、雇用問題は深刻であるが、その他は男性に比べれば、強い懸念が表れてきていない。30代女性も同様だが、乖離率で見ると、「食材の品質」や「物価の水準」は高い数値と見ることも可能である。

「大きく不安が増した」に「やや不安が増した」を加えた。「不安が増した」合計を見ると、特徴がより顕著に表れる。20代男性の強い不安傾向は維持されている。基本的には身近で基本となる生活に対する不安が強く、長期的な社会課題に関しては、懸念を感じる程度が相対的に小さくなっている。

30代男性に関しては、ほとんどの項目で全体平均よりも小さい値となっており、社会において30代男性が安定した位置づけを得ていることが伺える。20代女性は雇用とともに、「食材の品質」や「物価の高騰」に懸念を感じている一方で、貧困に陥る懸念をあまり感じていないという特徴が見られた。

表2「以下の項目に関して、1年前と比べて、あなた自身の生活の不安感はどのように変化していますか。」
「大きく不安が増した」

	食材の品質	物価の水準(高騰)	年金給付制度の健全性	地域医療制度の健全性	雇用(働く場所)の維持・就職の機会	収入・日々のやりくり	貧困に陥る懸念	治安	健全な(交流のある)地域社会の維持	地球環境・地域環境の維持
全体	3.8	5.2	23.8	10.7	28.8	21.5	14.6	9.6	3.6	7.9
男性20代	5.9	8.9	29.7	11.9	39.6	35.6	22.8	12.9	5.9	9.9
乖離	2.1	3.7	5.9	1.2	10.8	14.1	8.2	3.3	2.3	2.0
男性30代	2.6	4.3	27.4	15.4	19.7	22.2	15.4	6.0	5.1	9.4
乖離	-1.2	-0.9	3.6	4.7	-9.1	0.7	0.8	-3.6	1.5	1.5
女性20代	5.0	7.5	23.3	10.0	37.5	25.8	15.8	10.0	4.2	8.3
乖離	1.2	2.3	-0.5	-0.7	8.7	4.3	1.2	0.4	0.6	0.4
女性30代	7.8	8.6	31.0	12.9	30.2	21.6	17.2	13.8	4.3	5.2
乖離	4.0	3.4	7.2	2.2	1.4	0.1	2.6	4.2	0.7	-2.7

「大きく不安が増した」+「やや不安が増した」

	食材の品質	物価の水準(高騰)	年金給付制度の健全性	地域医療制度の健全性	雇用(働く場所)の維持・就職の機会	収入・日々のやりくり	貧困に陥る懸念	治安	健全な(交流のある)地域社会の維持	地球環境・地域環境の維持
全体	28.8	44.2	58.7	41.7	61.7	62.0	47.9	42.7	20.7	39.4
男性20代	31.6	52.5	55.4	37.6	68.3	69.3	55.5	34.7	19.8	37.6
乖離	2.8	8.3	-3.3	-4.1	6.6	7.3	7.6	-8.0	-0.9	-1.8
男性30代	24.0	44.5	53.0	35.9	56.5	58.1	47.9	36.8	20.5	35.9
乖離	-4.8	0.3	-5.7	-5.8	-5.2	-3.9	0.0	-5.9	-0.2	-3.5
女性20代	35.8	53.3	55.8	41.7	72.5	67.5	40.8	35.8	18.4	36.6
乖離	7.0	9.1	-2.9	0.0	10.8	5.5	-7.1	-6.9	-2.3	-2.8
女性30代	31.1	48.3	61.2	41.3	62.1	60.4	46.5	50.0	18.1	38.0
乖離	2.3	4.1	2.5	-0.4	0.4	-1.6	-1.4	7.3	-2.6	-1.4

貧困への懸念に関しては20代男性と20代女性の危機感の差が顕著であり、何らかの原因が背景にあるのかどうかは気になるところである。例えば、女性の意識の中に結婚という逃げ道がある、という意識が未だに存在しているのかどうか。あるいは、男性の意識の中に、家族を養わなければならないという義務意識、イメージが、貧困への懸念を増加させているのであろうか。

30代女性も、男性ほどではないけれども、20代に比べて生活不安に対する耐性は増している。ただ子育てステージに入るからなのか、治安に対する懸念を意識することが数値から見て取ることができる。

このように、不安の増加、減少は社会全体の問題であるけれど、世代によって身近に、あるいは切実に感じる要因が異なることが分かる。当然、それは社会に対する見方や評価の違いとなって表れて来ることが予想される。

2-3. 社会に対する貢献意識

質問内容「あなた自身は社会に対してどのような貢献ができる、あるいはしようと思いませんか。あなたが取り組もうと強く思うものすべてを選んでください。」

選択肢：ボランティア活動に参加する、地球環境に配慮した生活をする、子供を育む、正しく納税する、勤労の義務を果たす、(基本的)人権を尊重する、法令を遵守する、社会道徳やマナーに従う、寄付等に協力する、身近な助け合いの気持ちを持ちそれを実行する、その他。

結果：図3の通りである。「社会道徳やマナーに従う」(58.5%)が最も多く選択された。

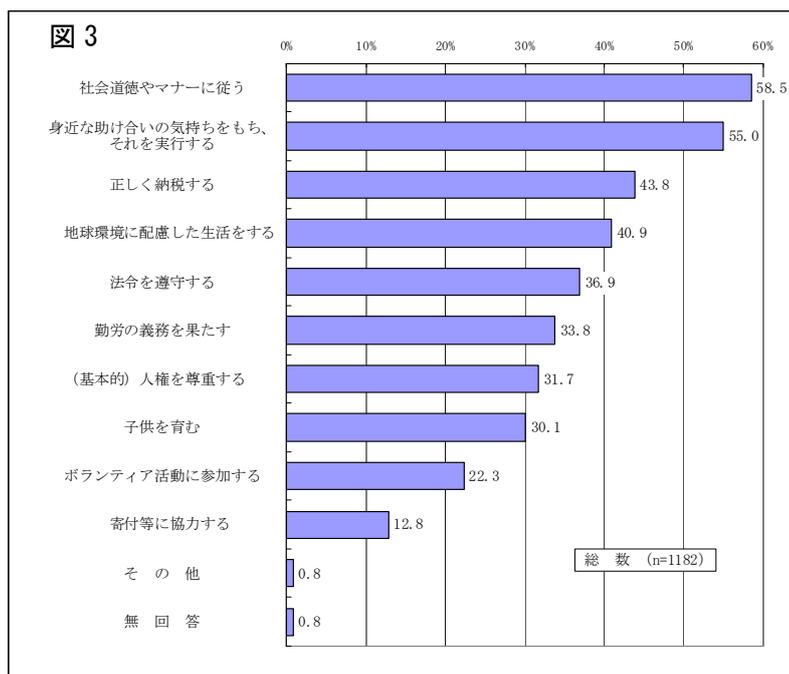
とはいえ何が社会道徳で、どんなものがマナーの範疇に入るかは、必ずしも明らかではない。自分が守るべきだと思っている行為が社会道徳だと定義してしまえば、それに従うことは当たり前なので、質問との関係でいえばトートロジーになってしまう。

逆に40%以上の回答者がこの項目を選択していないということは、自分の行動基準の外に、なにがしか客観的に決められている社会的なルールがあると認識していることを表しているともいえる。

あるいは、それは当たり前のことで社会に貢献したことにはならないと判断しているのかもしれない。

いずれにせよ「社会道徳やマナーに従う」(58.5%)という選択肢は様々な解釈のできる曖昧性を持っているので、本来は回答のための選択肢としては適当ではない。ただ、そうではありながらも、社会道徳やマナー、ひいては倫理というものを、生活者はどのように意識しているのかという基本的な態度を知りたいという意図から選択肢に加えた。

社会道徳の次には「身近な助け合いの気持ちを持ち、それを実行する」(55.0%)が続き、少し離れて「正しく納税する」(43.8%)、「地球環境に配慮した生活をする」(40.9%)、「法令を遵守



する」(36. 9%)、「勤労の義務を果たす」(33. 8%)などが続いている。

実は事前の仮説では「正しく納税する」、「法令を遵守する」、「勤労の義務を果たす」といった、誰もが評価し、実行が目に見える義務項目が上位にランキングされるのではないかと考えていた。さらにいえば、それらが6割、7割といった、高い水準で選択されると予想していた。結果が事前の予想や仮説と異なった原因として、生活者の意識が社会に対する貢献イメージをかなり高いハードルとして認識していることが考えられる。法令遵守や納税、勤労は当たり前で、それは社会に対する貢献といえるほどのことはない、という意識である。

実際には、もっと緻密な検証が必要であるが、もしそのような意識があるとするれば、評価されるべき点としては、志の高さが挙げられるであろう。社会的な課題の解決を、生活者の積極的なコミットメントで支援することを期待するならば、志の高さを、啓発行為などで刺激すれば、実際の行動に反映される可能性が高くなるはずである。

一方、懸念されることは評価の基準を高くしすぎ、かえって社会への貢献というコンセプトが迂遠な存在になってしまう可能性である。納税や勤労も立派な社会貢献であるにもかかわらず、社会への貢献という行為のハードルを上げてしまうと、むしろ敷居が高くなり、自分には無理だと近づくがたくなる危険性がある。

社会道徳や身近な助け合いの実践を、言葉だけでなく、どのように顕在化、実践化していくかという社会的な取り組みに落とし込んでいくべきなのかについて、新たな問題意識を得ることができた。

さて、この設問に関しても若年層に注目して結果を確認してみる。その全体像が表3である。表では高齢者のデータは省略している。しかし、まず年齢層で見たときの基本的な傾向は、このような社会貢献に対して積極的な姿勢であるのは高齢層、その中でも特に女性であるということだ。

表3 「あなた自身は社会に対してどのような貢献ができる、あるいはしようと思えますか。あなたが取り組もうと強く思うものすべてを選んでください。」 (%)

	ボランティア活動に参加する	地球環境に配慮した生活をする	子どもを育む	正しく納税する	勤労の義務を果たす	(基本的)人権を尊重する	法令を遵守する	社会道徳やマナーに従う	寄付等に協力する	身近な助け合いの気持ちをもちそれを実行する	その他
全体	22.3	40.9	30.1	43.8	33.8	31.7	36.9	58.5	12.8	55.0	0.8
男性20代	11.9	29.7	32.7	34.7	40.6	32.7	31.7	55.4	9.9	47.5	1.0
乖離	-10.4	-11.2	2.6	-9.1	6.8	1.0	-5.2	-3.1	-2.9	-7.5	0.2
男性30代	11.1	29.1	46.2	36.8	41.0	24.8	32.5	44.4	5.1	49.6	1.7
乖離	-11.2	-11.8	16.1	-7.0	7.2	-6.9	-4.4	-14.1	-7.7	-5.4	0.9
女性20代	15.8	35.8	46.7	39.2	36.7	27.5	25.8	54.2	10.8	60.8	0.8
乖離	-6.5	-5.1	16.6	-4.6	2.9	-4.2	-11.1	-4.3	-2.0	5.8	0.0
女性30代	16.4	40.5	57.8	39.7	29.3	29.3	27.6	61.2	14.7	56.9	0.0
乖離	-5.9	-0.4	27.7	-4.1	-4.5	-2.4	-9.3	2.7	1.9	1.9	-0.8

もちろん「子どもを育む」という選択肢は30代が中心になるといった、項目別の特徴はあるものの、総じて高齢の女性回答者の積極的姿勢が特徴的である。そのような中、20代男性は「勤労の義務を果たす」という項目以外は、ほとんどの選択肢で平均よりも大幅にマイナスとなっている。ボランティア、地球環境、助け合いといった、他者配慮に対する意識が相対的に低いことが表れている。法令遵守に対する意識が低いことも気になる。

30代男性は、20代男性に輪をかけたような結果となっている。勤労の他、女性ほどではないものの、「子どもを育む」という意識が高い。一方、その他の項目については意識の低さが顕著に表れている。30代男性は、社会的な課題にも関心が低く、社会貢献意識もあまりない。一方で、社会不安も大きくはないという状態はどのように理解すればよいのであろうか。生活リスクを感じないので、他者と分かち合う必要性に対する意識が薄いのか。

実際には、日々の暮らしに精一杯で社会全体に対する関心や貢献意識を持つ余裕がないのかもしれない。日々の暮らしに専念していると、社会不安などもあまり感じずにすむという見方もあろう。

とはいえ、次代の社会を背負っていくべき 30 代に、もっと全体のことを鳥瞰、俯瞰する気持ちを持つような社会が望ましいのではないかと思う。

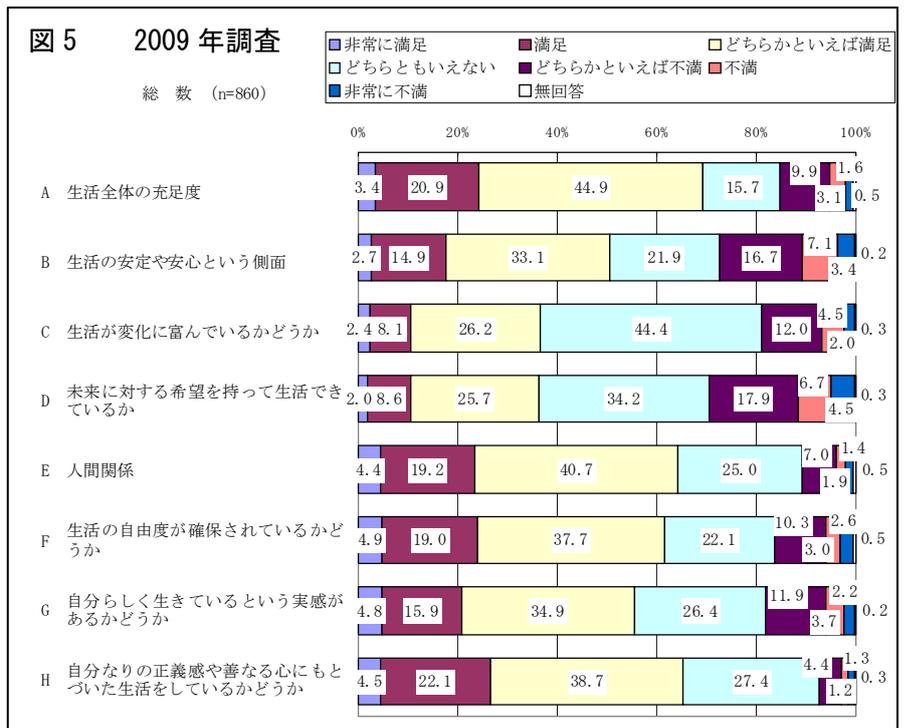
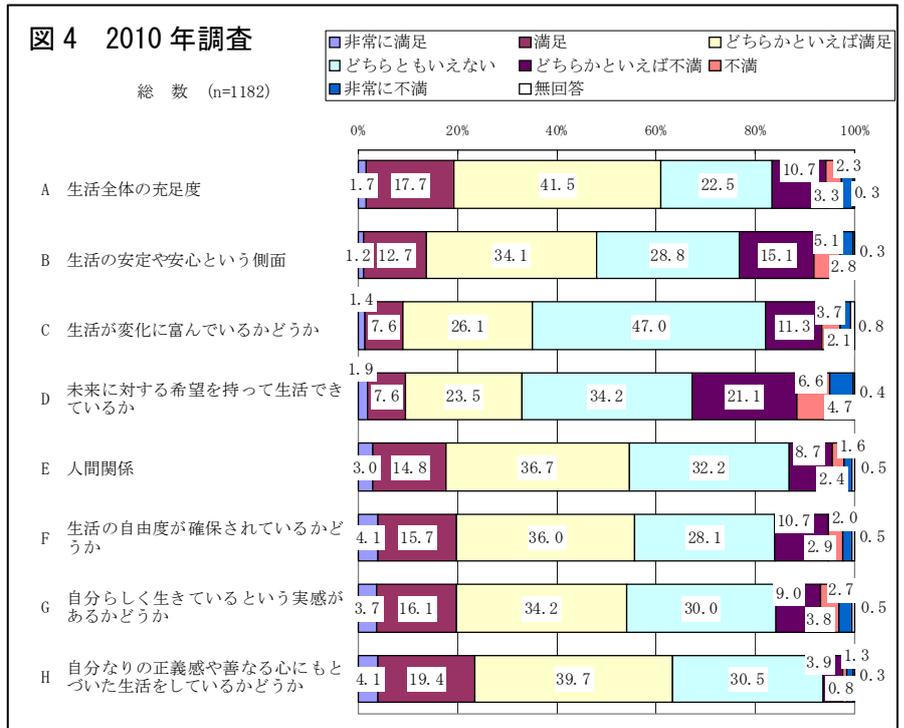
初婚年齢が上がりつつあるというトレンドが存在するとはいえ、20 代女性では「子どもを育む」という意識が強い。他に「身近な助け合いの気持ちを持ち、それを実行する」という項目も高い。因みにこの項目は、男性全体の平均値が 49.6% であるのに対し、女性全体の平均は 60.4% と 10 ポイント以上の開きがある。「地球環境に配慮した生活をする」という項目も女性が 12 ポイント以上高い数値を示している。次世代や他者の配慮という面で、女性的な感覚や価値観が今後重視されるようになるのではないだろうか。

ただ、30 代女性に関しては「子どもを育む」という項目こそ高いものの、後は 30 代男性と同様、意識の低さが目立つ。やはり 30 代というのは生活していく上での課題が多すぎて、どうしても余裕を持つことが難しいということのようである。

2-4. 生活充足度（満足度）

質問内容「今現在のあなたの生活満足度についてお聞かせください。」

回答方法「非常に満足」「満足」「どちらかといえば満足」「どちらともいえない」「どちらかといえば不満」「不満」「非常に不満」
項目：生活全体の充足度、生活の安定や安心という側面、生活が変化に富んでいるかどうか、未来に対する希望を持って生活できているか、人間関係、生活の自由度が確保されているかどうか、自分らしく生きているという実感があるかどうか、自分なりの正義や善なる心に基づいた生活をしているかどうか
結果：図 4 の通りである。生活満足度に関しては、絶対値より



はその変化を追うことに意味がある。従って昨年と同じ設問に対する回答結果も併記する（図 5）。ただし、注意しなければならないのは、昨年の回答者と今年（2010年）の回答者で、質的な差があることだ。

本調査は、基本的にはパネル調査を行っている。即ち、一度お答えいただいた方をお願いして、毎年継続的に回答していただいている。しかし、転居などで年々回答者が減っていくことは避けられない。従って、定期的に回答者を追加していくことが必要になる。

その際、若年者の方が移動したり、調査時不在であったりする確率が高いので、どうしても回答者に占める若年層のシェアが低下していく。従って今回の調査では、特に若年層に絞って回答者を増やした。その結果、回答者の属性に関し、今年と昨年では比較的大きな差異が発生していることが懸念されるのである。

特に生活充足度に関しては、年齢階層で回答に比較的明らかな違いがある。例えば、若年層は相対的に回答の分散が大きい。つまり、非常に満足と答える人も多いが、非常に不満と答える人も多いというような特徴がある。

従って、図 4 と図 5 をそのまま比較することは適当ではない。重複する回答者のみを取り上げるなどの工夫が必要である。今回は、新しく追加した若年層に焦点をあてているので、あえてそのような調整は行わないがご了承いただきたい。

簡単に比較しておくとして、総合指標としての「生活全体の充足度」を見ると、明らかに満足という回答が減り、不満という回答が増えていることが分かる。

では年齢階層別ではどうであろうか。昨年（2009年）調査と今年（2010年）調査で、年齢階層×性別で「生活全体の充足度」について比較を行った。それが表 4 である。数値は（2010年の値－2009年の値）である。値が正ならば、生活充足度の評価が改善したことを表し（表 4 では黄色で表示）、負であれば悪化したことを表す（同じく水色で表示）。

これを見ると、全体的に生活充足度が低下したことが明確である。ただし回答者の 20 歳代、30 歳代に関しては、新しい回答者が増えているので、同一人物の心境の変化を表した数値ではない。一方で 40 歳代以上のほとんどは、同一回答者の答えであるので、1 年間の心の変化を表しているといえる。

年齢階層別にいえることは、40 歳代以上の生活充足度の低下が著しいことである。逆に若年の男性を見ると、唯一 30 代がかなり大幅に生活充足度の値を改善していることが分かる。20 代を見ても、満足合計は減少しているものの、それ以上に不満の「合計」は減少している。もちろん、細かく見れば、20 代男性の「非常に不満」「不満」は増えており、「どちらかといえば不満」が大幅に減った結果として、不満全体が減っているもので、程度を加味した不満度がどうであるかについては精査が必要である。

おそらく「どちらかといえば不満」層が、より不満度を高めたグループと、「どちらともいえない」に移ったグループに分かれたのであろう。解釈は難しいが、年長階層の生活充足度の明確な悪化と比較すると、一方的に悪くなったとはいえない結果となった。

表4「今現在のあなたの生活満足度についてお聞かせください。2009年調査と2010年調査の比較」
%

	非常に満足	満足	どちらかといえば満足	どちらともいえない	どちらかといえば不満	不満	非常に不満	満足(計)	不満(計)
全体	-1.7	-3.2	-3.4	6.8	0.8	0.2	0.7	-8.3	1.5
男性20代	-2.1	-4.6	3.9	6.5	-11.5	4.0	3.0	-2.9	-4.6
男性30代	-0.4	-1.1	9.2	1.0	-4.3	-2.4	-2.1	7.7	-8.8
男性40代	-1.1	5.0	-14.3	9.5	1.6	-6.6	5.8	-10.3	0.8
男性50代	-0.3	-11.0	-2.8	5.8	7.0	-0.6	1.0	-14.0	7.4
男性60代	-3.8	-5.6	-1.0	10.0	-0.5	2.4	-1.5	-10.3	0.3
女性20代	-6.3	0.2	-1.2	4.1	5.8	-1.2	-2.1	-7.3	2.4
女性30代	-3.4	5.1	-3.8	3.6	-7.7	4.5	1.7	-2.1	-1.5
女性40代	-0.7	-3.3	-7.2	9.0	0.7	1.2	1.1	-11.2	3.0
女性50代	-3.4	-1.5	-5.3	5.5	2.8	0.9	0.9	-10.1	4.6
女性60代	-1.5	-11.5	4.3	9.5	2.4	-0.8	-0.8	-8.7	0.9

女性に関しても 30 代に関しては、悪化はしているとはいえ、一方的ではなく、20 代男性のパターンと似た動きをしている。

では年齢階層間の差異はどうなっているのでしょうか、2010 年の「生活全体の充足度」のデータをもとに、全体の平均と年齢階層別の結果を見たのが表 5 である。20 代、30 代のみ全体平均との乖離を計算し、表に含めている。

これを見ると、まず 20 代男性はやはり、回答の分散が大きい。即ち、極端な答えをする回答者が多いことが分かる。ただそれを「満足」「不満」というように“集計”してしまうと、平均とそれほど変わらなくなってしまう。

一方、30 代の男性はまだらであるが、満足の合計値は年齢階層別で見ても最も高い（男性の中での比較）。逆に男性の 50 代は全ての階層性別で最も生活充足度が低い。女性は 40 代の生活充足度が低い。ライフステージから見て、このころが最も悩み多き時代なのかもしれない。

表5 「今現在のあなたの生活満足度についてお聞かせください。」

	非常に満足	満足	どちらかといえば満足	どちらともいえない	どちらかといえば不満	不満	非常に不満	満足(計)	不満(計)
全体	1.7	17.7	41.5	22.5	10.7	3.3	2.3	60.9	16.2
男性20代	5.0	16.8	39.6	20.8	9.9	4.0	3.0	61.4	16.8
乖離	3.3	-0.9	-1.9	-1.7	-0.8	0.7	0.7	0.5	0.6
男性30代	3.4	16.2	41.9	22.2	11.1	3.4	1.7	61.5	16.2
乖離	1.7	-1.5	0.4	-0.3	0.4	0.1	-0.6	0.6	0.0
男性40代	0.0	19.8	38.0	23.1	10.7	2.5	5.8	57.9	19.0
男性50代	0.8	12.7	38.1	26.2	13.5	4.8	3.2	51.6	21.4
男性60代	0.0	15.6	44.5	28.9	6.3	3.9	0.8	60.2	10.9
女性20代	2.5	20.8	40.0	21.7	11.7	1.7	0.8	63.3	14.2
乖離	0.8	3.1	-1.5	-0.8	1.0	-1.6	-1.5	2.4	-2.0
女性30代	2.6	24.1	41.4	15.5	7.8	6.9	1.7	68.1	16.4
乖離	0.9	6.4	-0.1	-7.0	-2.9	3.6	-0.6	7.2	0.2
女性40代	1.8	16.2	36.0	24.3	11.7	5.4	4.5	54.1	21.6
女性50代	0.9	17.5	44.7	20.2	14.0	0.9	1.8	63.2	16.7
女性60代	0.8	17.2	50.0	21.1	10.2	0.0	0.0	68.0	10.2

女性に関していえば、40 代を

除けば全ての年齢階層で、「満足」の合計値が、どの男性の年齢階層よりも高い。つまり、数値で見ただけでは、女性の方が男性よりも生活を謳歌していることが示唆される。これは本調査のみの現象ではなく、多くの調査で同様の結果が出ているので、一定の頑健性のある事実だと考える。

20 代女性については、「満足」の水準では、全女性の中で中間の部類に入る。一方、30 代女性はあらゆる年齢階層・性別の中で、最も「満足」率が高い。既に述べたように 40 代になると女性の中では最も低い数字となることが不思議である。単にデータのノイズにすぎないのか、何かライフステージ、ライフスタイル上の理由があるのかは興味深い論点である。

3. 考察

第 2 節で、関心のある社会経済問題、生活の不安感、社会に対する貢献方法、そして生活満足感（充足感）について、質問内容と、その結果、特に若年層が持つ意識の特徴に焦点を当てて確認してきた。結果は既に述べてきたとおりであるが、そこからいくつかの問題意識を抽出することができたように思う。

一つは若年層を取り巻く雇用問題の深刻さである。男女を問わず、20 代の雇用に関する懸念は大きく、そのかなりの部分が日本の労働市場の問題点と関連づけることができる。よくいわれていることであるが、既得権を持つ被雇用者、すなわち年長の労働者（正社員）が、終身雇用や企業年金、下方硬直的な賃金を享受しているために、若年労働に対するニーズが顕在化しないだとか、新卒偏重の新規採用基準がロストジェネレーションを生んでしまうとかいった問題である。

特に、新卒で職を得られず、非正規雇用となった場合、そこからステップアップするキャリアモデルを構築することが必要だ。この問題に対し、特に 20 代の危機感が明確に表れた。

一方、社会問題に対する責任意識や、それに対処しようという意識は女性が強いことが示された。特に年長者は、そのような迂遠な問題を考える余裕があるからかもしれないが、関心は高い。逆に、

忙しいとはいえ、若年層がそのような社会意識を持つことの必要性和、その方策に関して、もっと敏感でも良いのではないかと感じた。これが第二の問題意識である。

特に持続可能な社会や生活を構築するためには、今後、自助や公助だけでなく、共助もうまく組み合わせていく必要が出てくるはずだ。地域にもよるとは思うが、そのような共助の担い手として、リタイアした生活者なども積極的にコミットすることが望まれる一方、やはり若年層も大きな戦力として期待されている。

今回の調査では、特に男性の社会貢献に対する関心の低さが顕著であった。自分のことで精一杯で余裕がない、という実態の中、個人だけに責任を押しつけることは適当ではない。様々な啓発活動の中で、個人としても様々なことを考えるのは望ましいが、それを妨げるような社会の仕組みを見直していくことは必要であろう。

よくいわれるワークライフバランスが一つの切り口であると思うが、それが単独に取り扱われるのではなく、持続可能な社会づくりの中で、どのように位置づけられるべきなのかを並行して考えていく必要がある。即ち、ワークの対概念であるライフの中にパブリックやコミュニティの視点が入っていることが望ましいし、さらにいえばワークの中にもソーシャルの視点やコンセプトが組み込まれていくことが求められるのではないかと考える。

第三の問題意識として、生活充足度（満足度）に関して、データの若年層の覇気があまり感じられなかったことである。やはり、若さは力であり、20代30代の時期に生活充足感を享受することが人生の充実のためにも必要だ。年長者と比較すると多少満足感が高いようだが、それでももっと希望と満足感のあふれる社会に方向付けることが必要ではないか。

そのためにはまずは日本社会を持続可能な社会に作り上げ、若年層に希望と安心の基礎を与えることが重要である。

本調査から4つの設問を取り出し、年齢階層という視点を重視して結果を確認した。実際には幸福感に関する調査も行っている。これについては、次号で報告、分析を行い、今回の結果とあわせて考察していきたい。

以上

<参考資料>

大阪ガス株式会社 エネルギー・文化研究所：「これからの住まいとライフスタイルに関する生活意識調査」（2010年調査結果、一部2009年も利用）